

軟式庭球の国際化と日満交驩軟式庭球競技大会 (1939)

村 井 友 樹 (東京理科大学) *

Internationalization of soft tennis and the Japan-Manchuria Soft Tennis goodwill match in 1939

MURAI Yuki (Tokyo University of Science) *

(2020年7月17日受理)

Abstract

The Japan-Manchuria Soft Tennis goodwill match sponsored by Japan Soft Tennis Association (JSTA) was held in 1939. This goodwill match was the first international soft tennis match and is considered important in the international popularity of soft tennis. The purpose of this study is to clarify the history and actual situation of this match, and to question its historical significance.

The JSTA's aim was to popularize the soft tennis internationally. They first attempted to hold goodwill match in Manchuria and participate in the Tokyo Olympics. This movement has a background in which it is difficult to gain public attention unless internationalizing soft tennis, and for internationalization, the JSTA emphasized Manchuria where soft tennis was popular.

However, the outbreak of the Sino-Japanese War led to the cancellation of the goodwill match in Manchuria and the movement of the JSTA toward internationalization was overshadowed. Under such circumstances, Manchuria proposed holding a Japan-Manchuria Soft Tennis goodwill match. The JSTA accepted the proposal, and positioned the goodwill match as the beginning of the internationalization of soft tennis. The goodwill match was a turning point in restarting the international movement of soft tennis by the JSTA which was in a state of stalemate.

The Japan-Manchuria Soft Tennis goodwill match that was held in Japan gained a great deal of attention as the first international soft tennis match. However, the match between Japan National Team and Manchuria National Team was not held, and it was not enough to call it an international match. Nevertheless, the fact that it attracted attention as the first international soft tennis match led to increased interest in soft tennis. The Japan-Manchuria Soft Tennis goodwill match became a place to appeal to the public that soft tennis was an internationalized sport.

キーワード：ソフトテニス、満洲国、国際試合

Key Words: soft tennis, Manchuria, international match

1. はじめに

日本では近代テニスが入り移ると高価な硬球の代用品として軟球が用いられるようになり、日本独自のルールによる軟式庭球（現在のソフ

トテニス）が創造された。軟式庭球は日本国内では隆盛を極めたが、いわゆる硬式庭球のような国際的な広がりには至っていなかった。このような状況下の1939（昭和14）年に日満交驩軟式庭球競技大会（以下「日満軟式庭球大会」と略す）

が日本軟式庭球連盟の主催により開催された。日満軟式庭球大会について、当時、日本軟式庭球連盟の常務委員であった山邊貞雄は以下のように回顧している¹⁾。

軟式庭球が日満交驩競技を特に重視したことは、いうまでもなく軟式庭球は東洋独特のものであって、所謂国際競技大会種目でないから、初めての国際試合（ママ：引用者）であることゝ、軟式庭球を近接外地にも大いに盛んに奨励する意味に於て、この試合の成功に万全の努力を払ったのである。

日満軟式庭球大会は軟式庭球にとっての初めての国際試合として位置づけられ、軟式庭球の国際普及において重要視されたようである。本研究では、この日満軟式庭球大会の開催経緯や実態を明らかにし、その歴史的意義を問いたい。

表孟宏が編集した『日本庭球史』²⁾では、軟式庭球史を①創世、②胎動（明治中期）、③隆盛（明治後期）、④衰退（大正期）、⑤繁栄と中断（昭和初期～第2次世界大戦）、⑥再隆盛（昭和20年以降）に時期区分している。これに従えば、日満軟式庭球大会の開催は⑤繁栄と中断の特に「繁栄」の時期にあたる。この時期の軟式庭球界は、明治神宮競技大会で使用するルールに対する見解の相違を発端とした内紛に終止符を打つために新たな国内統括団体を組織し、衰退した軟式庭球の再起を図ろうとしていた。

軟式庭球の国内統括団体については、ルールや公認球をめぐる内紛から設立・消滅・統合が繰り返されてきたが、1933（昭和8）年の日本軟球連盟の設立により全国的な統括団体として確立されたことが明らかになっている³⁾。一方、1913（大正2）年に慶應義塾大学庭球部が硬球を採用して以降、これに追隨して軟球から硬球に転向する学校庭球部が相次いだことで軟式庭球は衰退へと向かうが、この学校庭球部の硬球転向にはオリンピック大会に日本人選手が初参加するなどの「スポーツの国際化」という社会背景があったことが指摘されている⁴⁾。また、1924（大正13）年の第1回明治神宮競技大会には、国際的な競技ではないという理由で軟式庭球が採用されなかったようである⁵⁾。つまり、軟式庭球が国際的な競技でなかったことが衰退の要因の一つにあったと考えられ、衰退した軟式庭球の再起のために日本軟球連盟には軟式庭球の国際化⁶⁾という課題が付きまとっていたと予想される。そして、この文脈において日満軟式庭球大会の開催を捉えることができるのではないかと推測できる。ちなみに、日本軟球連盟は1935（昭和10）年に日本庭球連盟、日満軟式庭球大会の開催直前の1939（昭和14）年に日本軟式庭球連盟に

改称している。

一方、中国東北部柳条湖において南満洲鉄道の線路が爆発されたことを契機として日本関東軍は軍事行動を起こし、このいわゆる満洲事変により1932（昭和7）年3月に日本の傀儡国家「満洲国」の建国が宣言されるに至った。建国の正当性を内外に示すための媒体として、満洲国ではスポーツが重視された⁷⁾。そして、国外的には、満洲国スポーツ界はオリンピックや極東選手権競技大会への参加を目論み、それが挫折に終わっても東洋体育協会への加盟、日満華交驩競技大会や満洲国建国十周年慶祝東亜競技大会の開催など、主に日本や「東洋」「東亜」のスポーツ界との関りを模索し続けた⁸⁾。こうした満洲国スポーツ界の動向に鑑みれば、日満軟式庭球大会を研究対象とすることは軟式庭球史だけでなく、東北アジアスポーツ史の一端を紐解くことにも繋がるであろう。

以上のことを踏まえて本研究では、日本庭球連盟・日本軟式庭球連盟の機関誌⁹⁾を主たる史料とし、まず日本庭球連盟の軟式庭球の国際化に関する動向とその背景を確認し¹⁰⁾、その上で日満軟式庭球大会の開催経緯と実態を明らかにする。

2. 日本庭球連盟の国際化構想

2-1. 国際化に向けた動向

（1）満洲国遠征

軟式庭球の国際化に関する言及は、日本軟球連盟から日本庭球連盟への改称が承認された1935（昭和10）年1月の評議員会に見ることができる。この評議員会では、「本競技を以て満洲国と親善を計るに資すると共に軟球競技をして国際的進出せしむ」ことを趣旨とする「満洲国対抗競技ニ関スル議案」が審議、可決された¹¹⁾。満洲国では1934（昭和9）年に全満洲軟式庭球選手権大会（個人戦）、全満洲軟式庭球大会（対抗戦）などが開催されている¹²⁾。つまり、日本庭球連盟は、軟式庭球がある程度普及している満洲国との対抗戦を足掛かりとして軟式庭球の国際化を図ろうとしたのである。

満洲国との対抗戦は、費用捻出の見込みが立たなかったことから直ぐに具体化することにはなかった¹³⁾。しかし、南満洲鉄道庭球部の招聘を受けることで計画が進展し、日本庭球連盟は1937（昭和12）年7月20日から8月3日に日本代表を満洲国に遠征させることになった¹⁴⁾。満洲国との対抗戦は、日本から満洲国に遠征をする形式で実施される運びとなったのである。

この満洲国遠征では、日本代表として東京、名古屋、大阪、神戸などの地域から14名の選手が

選ばれ、満洲国代表と対戦することになった¹⁵⁾。ところが、日中戦争の勃発により南満洲鉄道庭球部が実施見合わせを希望したことから、満洲国遠征は中止せざるを得なくなってしまった¹⁶⁾。

(2) チルデン、ヴァインズ招待庭球大会

1936(昭和11)年10月に硬式庭球の世界的選手のビル・チルデン(Bill Tilden)、エルスワース・ヴァインズ(Ellsworth Vines)らが読売新聞社の招待により来日した。読売新聞社運動部長の星野龍猪は、「この二人に軟球を見せたい、見せて批評をしてもらひたい、その上できたら二人にやらせてみたいといふ念願は庭球連盟の鈴木氏から聞かされてゐた」¹⁷⁾ことから、チルデンとヴァインズに軟式庭球の観戦を打診した。両者の快諾を得たことで、日本庭球連盟はチルデン、ヴァインズ招待庭球大会を同年10月27日に読売大庭球場で開催した。この招待大会においてチルデンとヴァインズは、軟式庭球を体験して「軟球のスピードのない事には、余程歯がゆい感じを抱いた」が、試合は興味深く観戦したようである¹⁸⁾。

星野に斡旋を依頼した日本庭球連盟理事の鈴木堅三郎は、招待大会の目的を「我が国特有の軟式庭球の真価を紹介して、国際的進出を図る」と言及し、チルデンとヴァインズに「日本に來た土産話として国産庭球を宣伝」してもらふことを期待していた¹⁹⁾。つまり、招待大会には軟式庭球の国際化が意図されていたのである。

(3) 東京オリンピック番外競技

1936(昭和11)年7月の国際オリンピック委員会総会において1940(昭和15)年の第12回オリンピック大会(以下「東京オリンピック」と略す)が東京市で開催されることに決まった。これに関連して、1937(昭和12)年1月の日本庭球連盟評議員会では「三年後の本大会(東京オリンピック:引用者)にはナショナルゲームとしては是非とも参加したき熱望をもって運動開始以來現在までの経過とその見透し」²⁰⁾が報告された。オリンピック大会の開催都市は、「国技」と「国外ニ発達セル競技」の各1種目を番外競技として加えることができた²¹⁾。つまり、日本庭球連盟は、東京オリンピック番外競技に軟式庭球が選ばれるように交渉を進めていたのである。

日本庭球連盟会長の宮田光雄は、東京オリンピックに関して以下のように言及している²²⁾。

本競技の特質を考へます時、私は本競技の国外進出についても非常な期待を持って居るのであります。明年の東洋選手権大会、三年後の世界オリンピック大会はこれを世界に紹介するに最もよい機会であると考へますので、これ

また何等かの形式で参加し得るやう本部役員をして已に交渉を開始せしめてゐる次第であります。

このように東京オリンピックは、世界に軟式庭球を紹介する絶好の機会であると位置づけられていたのである。ちなみに、1938(昭和13)年に開催される計画であった東洋選手権競技大会²³⁾にも同様の理由で参加が目指されていた。

しかし、軟式庭球は東京オリンピック番外競技として選ばれなかった²⁴⁾。また、東洋選手権競技大会も開催されることなく、日本庭球連盟は軟式庭球の国際化を図る絶好の機会を失うことになった。

2-2. 国際化構想の背景

(1) 正親不二夫「国技庭球の国際化」

日本庭球連盟理事の正親不二夫は、軟式庭球の国際化に関する当時の見解を「国技庭球の国際化」と題して以下のように述べている²⁵⁾。

国技庭球の国際化、これはずっと以前、軟球協会時代から一部の人々の間には考へられてゐたことであるが、昨今理事の間では鈴木氏が最も熱心に唱へてゐる。僕は從來この問題に関しては消極的意見を持つてゐた。四囲の事情を考へるとそんなことは云つてゐられないやうな気がしたからである。国技庭球の真価を信ずる以上、之れを先づ国民の間に正しく普及せしむることがわれ／＼の第一使命である。これをいゝ加減にしておいて国際化なんて云ふことは上つ滑りの気がしてならなかつたのである。本邦内に於けるプレーヤー数では断然他の競技を圧してゐるとは自負してゐるものゝ之れ等のプレーヤーを正しくプレーせしむるゝ為にはまだまだ多くの仕事がある。而も從來の統制機関は内容そのものすら常にぐら／＼してゐて、設立当初の抱負は一つとして満足に実現されてゐない。あれもこれもと事業を拡大して無理をするよりも、まだ茲二三年はコツ／＼地固めに全力を注ぐのがほんとうであると思つてゐる。

軟式庭球の国際化については、以前から一部の関係者の間では関心が持たれており、日本庭球連盟においてもチルデン、ヴァインズ招待庭球大会の首謀者であった鈴木堅二郎が推し進めていたようである²⁶⁾。それに対して正親は、軟式庭球を国民に普及させるための仕事はまだ多くあり、なおかつ、始動したばかりである日本庭球連盟の活動を無理に拡大するべきではないことから、軟式庭球の国際化に消極的な見解を持っていた。満洲国との対抗戦が評議員会で可決さ

れてから計画が具体化するまでに 2 年以上の期間が経ってしまった理由は、遠征費用の問題だけでなく、このような軟式庭球の国際化に消極的であった関係者が一定数いたことも影響していたと考えられる。

しかし、正親が「国際化の気運も漸次動いて来てゐるやうにも思はれるし、統制機関も今年（1937（昭和 12）年：引用者）あたりから確実に軌道に乗ることゝ思はれる。だから国際化のチャンスをつかむだけの心構えはこしらへておく方がよいと思ふ」²⁷⁾との見解を持つに至ったように、軟式庭球の国際化に理解が示されるようになる。この転機は東京オリンピックの開催決定であったとみられ、日本庭球連盟はチルデン、ヴァインズ招待庭球大会を開催したり²⁸⁾、東京オリンピック番外競技に軟式庭球が選ばれるように交渉を進めたりするようになったのである。

このように東京オリンピックの開催決定により軟式庭球の国際化の機運が高まったことで、満洲国との対抗戦の計画も進展することになった。正親が「ことに満洲国の同志に対しては、これはむしろこちらから積極的に働きかける必要があると思ふ」²⁹⁾と言及しているように、日本庭球連盟は満洲国に対して積極的に働きかけるようになったのである³⁰⁾。

（2）石井昌二郎「軟球の発展について」

日本庭球連盟は、なぜ軟式庭球を国際化しようとしたのか。石井昌二郎は日本庭球連盟の役職に就いている形跡はないが、当時の軟式庭球界が置かれていた状況について以下のように端的に述べている³¹⁾。

過去に於て全国を風靡した軟球であるだけ、尚現今にても大いに盛んであるが、然し、過去の華やかさには及ばない。男子中等学校も大毎浜寺時代は何と云っても盛んなものであった。後浜寺が準硬球に変わってから、中等学校の軟球は衰弱の極に達し、寧ろ女学校に却って盛んになって来た。然るに昭和八年庭球連盟が生れ、各府県とも活気を恢復して来た。殊に中学校方面は漸次盛んになりつゝある。一方大学や専門学校にも軟球部が出来、復興の途上にはあるが、質に於ては昔の比でなく、活気がないので、遺憾ながら今日では概して社会から興味を持たれなくなりつゝあるし、従つてジャーナリズムより見捨てられた形である。

大阪毎日新聞社による浜寺大会は「中等学校選手のメッカ」³²⁾であった。しかし、この浜寺大会が使用球を軟球から準硬球に変更すると、女学校を除き軟式庭球は衰退の極限に達することになった。日本庭球連盟の前身である日本軟球

連盟が設立されてからは軟式庭球の活気が戻りつつあったが、最盛期と比べて足元にも及ばない状況であり、その要因の一つとしては軟式庭球が世間やジャーナリズムから関心を持たれなくなったからだと考えられていた。

このような状況に対して石井は、「国際的のものは何れも新聞記事としても最高の人気を背負って居る」ことに触れ、「スポーツがインターナショナルに変わって来た」ことから「世界的にせねば今日のスポーツ界に取り残される」と言及している³³⁾。つまり、スポーツの国際化という社会背景において、軟式庭球を国際化しなければ世間やジャーナリズムからの関心が得にくく、このままではスポーツ界から忘れ去られるという危機感が軟式庭球界にはあったと考えられる。

3. 日滿交驩軟式庭球競技大会

3-1. 開催経緯

以上のような軟式庭球の国際化に向けた動向は、満洲国遠征が中止となったように日中戦争の影響を受けて影を潜めることになった。このような状況下において、日滿軟式庭球大会の開催に向けた動きが起こった。

1939（昭和 14）年 3 月 11 日、満洲軟式庭球協会理事長の奥田美徳から日本庭球連盟名誉会長の宮田に対して「軟式庭球の交驩競技会を隔年交互に開催致度旨の提案」³⁴⁾が書面で届いた。これが日滿軟式庭球大会の発端であった。同時期に無期延期となった東洋選手権競技大会に代わる日滿華交驩競技大会を同年 9 月に満洲国の新京で開催する計画が進められていた³⁵⁾。この日滿華交驩競技大会の実施種目に軟式庭球が含まれていなかったことが、満洲軟式庭球協会が日滿軟式庭球大会の提案をした理由の一つであったと推察される。

満洲軟式庭球協会の提案を日本庭球連盟は受諾した。その際の見解について、理事の正親は「一昨々満鉄庭球部の招きに応じ内地軍の編成も成り、船の予約もすみ愈々出発の間際になって支那事変勃発の為中止となつてしまつたが連盟でも予ねて日滿提携の機会を狙つてゐたので満洲側からの申出には趣旨に於て異存のある筈はない」³⁶⁾と言及している。満洲国との連携を模索していた日本庭球連盟にとって、満洲軟式庭球協会の提案を断る理由はなかったのである。

日本庭球連盟と満洲軟式庭球協会との調整役を担ったのは、在京していた満洲体育連盟主事の鈴木良徳であった。満洲軟式庭球協会からの提案を受けた日本庭球連盟は、「鈴木主事を訪ひ諸般の打合せをなし本連盟の希望するところを伝へ善処方要望」³⁷⁾した。そして、交渉の結果、

以下のような同年 5 月 6 日付の「日滿交驩庭球競技会要項」を以て日滿軟式庭球大会の開催が正式に決定した³⁸⁾。

- 一、本競技会は隔年之を行ふ。
- 一、本競技会の開催地は日滿両国交互となす。
- 一、開催地当該国代表機関は相手国代表機関に対しギャランティ五百円を負担す。
- 一、本競技会に出場せんとする夫々の国の競技者資格は日本国に於ては日本庭球連盟、満洲国に於ては大満洲帝国体育連盟之を保証す。但し朝鮮、関東州に特則を設くることあるべし。

このように日滿軟式庭球大会を隔年に日本と満洲国で交互に開催し、日本代表選手は日本庭球連盟、満洲国代表選手は満洲体育連盟が派遣することが決められた。そして、協議を経て第 1 回大会は日本で同年 8 月下旬から 9 月上旬にかけて開催されることになった³⁹⁾。

3-2. 開催準備

開催が決まった日滿軟式庭球大会を『読売新聞』は、軟式庭球初の「国際試合」と報じた⁴⁰⁾。満洲国との軟式庭球による交流は過去にも行われていたが、それは南満洲鉄道庭球部との対抗戦であった一方、今回は「独立国たる友邦満洲帝国を代表する庭球団」との対抗戦であった⁴¹⁾。そのため、日本庭球連盟理事の三島正雄が「我が国技軟式庭球の開創以来五十年、初めて接する国際戦たる満洲国との対抗戦は球界の赫々たる歴史に更に光彩を加ふ記念すべき試合である」⁴²⁾と述べているように、日滿軟式庭球大会は軟式庭球初の国際試合として注目されたのである。

ところが、日本庭球連盟は、日滿軟式庭球大会の開催準備に十分な時間を取ることができなかったようである。理事の北折辰雄が「率直に云へば、連盟としても、本部理事の更迭・機構の改組・佐々木会長の急逝等に引続いての事務所移転などで、相当のアタックを受けてゐる際だったので、予め立案してゐた歓迎や歓待に欠くる所甚だ大であった」⁴³⁾と振り返っているように、日滿軟式庭球大会の開催準備期間には、理事の更迭、機構の改組、佐々木敏綱会長の急逝、事務所の移転などの出来事が重なっていた。ちなみに、ここの機構の改組は大日本体育協会への加盟に伴うものであり、これを契機に日本庭球連盟は日本軟式庭球連盟へと改称した。

さらに、満洲国代表選手が突然に変更となる

問題も生じた。日本軟式庭球連盟は、満洲軟式庭球協会から通達された代表選手の名簿を外務省に提出していた⁴⁴⁾。ところが、事前連絡なしに代表選手が変更となり、それを日本軟式庭球連盟が知ったのは満洲国代表団が東京に向かっている途中のことであった⁴⁵⁾。「時局の影響に依りメンバーに若干の変更を見」⁴⁶⁾たようであり、この対応に日本軟式庭球連盟は追われることになった。北折が「正直なところ、事前に於ける双方の連絡とか打合せとかいふものにも、今になって振り返ってみると多少不足の点がないでもなかった」⁴⁷⁾と反省点を述べているように、日本軟式庭球連盟と満洲軟式庭球協会との意思疎通が不十分な状態で日滿軟式庭球大会の開催準備が進められていたのである。

3-3. 開催

(1) 趣旨

日滿軟式庭球大会の第 1 回大会は、日本軟式庭球連盟の主催、厚生省、東京市、大日本体育協会の後援により開催された⁴⁸⁾。日本軟式庭球連盟が外務省に提出した書類には、日滿軟式庭球大会の開催趣旨が以下のように示されている⁴⁹⁾。

本競技会開催の趣旨は日滿不可分の関係に鑑み両国に於て最も普及性のある本競技を通し両国民の親善並に体位向上に資すると共に統後国民の志気を昂揚し以て新東亜建設の聖業に寄与せんか為に他ならず候

このように日本と満洲国で普及している軟式庭球を通して、両国民の親善と体位向上に貢献することが日滿軟式庭球大会の開催趣旨であった。さらに、この書類には、「本競技会是我邦特獨の競技たる軟式庭球の国際的進出の第一歩にして洵に意義深きもの」⁵⁰⁾とも記されている。つまり、日本軟式庭球連盟は、両国民の親善と体位向上に貢献するためだけでなく、軟式庭球を国際化するための端緒として日滿軟式庭球大会を位置づけたのである。

(2) 試合

1939 (昭和 14) 年 8 月 26 日、開会式の後に学生代表と満洲国代表の試合が旧芝離宮恩賜庭園コートで行われた⁵¹⁾。その後、同年 9 月 6 日までの日程で東京代表、愛知代表、大阪代表、兵庫代表、愛媛代表、広島代表が満洲国代表と対戦した (表 1 参照)⁵²⁾。

表 1. 日満軟式庭球大会の日程と対戦結果

月 日	対戦と結果				場所
8月26日	△ (5)	学生代表	対	満洲国代表 △ (2)	旧芝離宮恩賜庭園コート
8月29日	○ (6)	東京代表	対	満洲国代表 × (1)	日比谷公園コート
9月1日	○ (5)	愛知代表	対	満洲国代表 × (2)	名古屋舞鶴公園コート
9月2日	○ (6)	大阪代表	対	満洲国代表 × (1)	大阪アサヒビールコート
9月3日	○ (6)	兵庫代表	対	満洲国代表 × (1)	神戸市民運動場コート
9月4日	○ (3)	愛媛代表	対	満洲国代表 × (4)	済美高等女学校コート
9月6日	× (3)	広島代表	対	満洲国代表 ○ (4)	広島高等女学校コート

備考：○は勝ち、×は負け、△は引き分け、括弧内は1回戦の結果である。

『庭球』5巻10号，1939年，16-38頁。「庭球」『アサヒ・スポーツ』17巻22号，1939年，9-10頁。「庭球」『アサヒ・スポーツ』17巻23号，1939年，17頁を参考に作成

表 2. 満洲国代表団の氏名と所属

団長	奥田美徳	満洲軟式庭球協会理事長
監督	加藤金保	満洲軟式庭球協会理事 ※
副監督	広野金吾	満洲体育連盟奉天市常務理事 ※
主将	長与次郎	衛生技術廠（新京）
選手	向井辰雄	満洲興業銀行（新京）
	巖秉律	満洲興業銀行（新京） ※
	本間尚	經濟部（新京）
	稲田恒夫	昭和製鋼所（鞍山） ※
	金明善	満洲電々会社（奉天） ※
	磯崎守雄	満洲電業会社（新京）
	李應麟	満洲興業銀行（新京） ※
	江崎春雄	満洲興業銀行（新京） ※
	堀内鶴吉	昭和製鋼所（鞍山） ※
	疋田良千代	開発会社（新京）
	植村正	満洲通信機会社（奉天） ※
	金文暉	満洲電々会社（奉天） ※
	三宅東	満蒙毛織会社（奉天）

備考：※は変更前と後の両方で選出された人物である。

「日満交驩軟式庭球競技の幕開く」『庭球』5巻10号，1939年，6-7頁を参考に作成

試合形式は、各代表ダブルス 7 組による 4 ゲーム先取の「一組抜き優退法」が採用された。これは各チーム同数の組を出してそれぞれ 1 回戦を戦い、勝ち残った組が 2 回戦、3 回戦と対戦し、どちらかのチームの全組が負けた時点で勝敗が決まる方法であり、日本軟式庭球連盟の競技規則に依るものであった⁵³⁾。

最初の学生代表と満洲国代表の試合は、日没のために引き分けとなった⁵⁴⁾。最後の広島代表と満洲国代表の試合は、満洲国代表が勝利した。しかし、これ以外の 5 試合では満洲国代表が敗北する結果となった。満洲国代表は過密日程の影響もあり「二、三の病人」を出したようであり⁵⁵⁾、大阪代表から広島代表までのすべての対戦で 1 組棄権したが、満洲国と日本の実力差があったことは否めない。

（3）選手

満洲国代表団は、団長奥田美徳、監督加藤金保、副監督広野金吾、選手は主将長与次郎のほか 13 名であった（表 2 参照）。変更前の満洲国代表選手は新京、鞍山、奉天、大連、撫順の 5 地域から 16 名選出されていた⁵⁶⁾。しかし、時局の影響による代表選手変更で満洲国代表選手は、新京、鞍山、奉天の 3 地域から 14 名の選出に留まった。

満洲国代表団についての関心事の一つは、「全

部日本人であるか、日満鮮の合体であるか、又満鉄人が主力であるか」⁵⁷⁾ということであった。満洲国代表選手 14 名中 10 名が在満日本人、残り 4 名の厳秉律、金明善、李應麟、金文暉は在満朝鮮人であったと推察される⁵⁸⁾。厳と李は明治神宮体育大会と神宮庭球大会に朝鮮代表として出場した経歴を持ち⁵⁹⁾、金明善については不詳だが、金文暉は朝鮮で育ったようである⁶⁰⁾。さらに、向井辰雄と江崎春雄は京城高等商業学校出身であった⁶¹⁾。満洲国代表選手は、日本や朝鮮で軟式庭球を行っていた人物が大半を占めていたとみられる。一方、南満洲鉄道庭球部からは選出されなかった⁶²⁾。

日本の各代表選手の人数や所属は、表 3 のようであった。各地域の代表選手は、民間会社、行政機関、教育機関、庭球倶楽部から選出された。また、学生代表選手は大学か専門学校から選出され、その特徴は、京城高等商業学校の張日剛、普成専門学校の趙漢龜、申東晟、延禧専門学校の曹晋五、李仁俊のように朝鮮の学校に所属する選手も選出されたことであり⁶³⁾、彼らは朝鮮人であったと推察される。学生代表の選出にあたり日本学生軟式庭球連盟は、「関東・関西・朝鮮の三地方から選手を集め本当の全日本学生代表たらしめ」⁶⁴⁾という方針を立てていたのである。

表 3．日本選手の人数と所属

代表（選手数）	所属（選手数）
学生（21）	法政大学（3）、早稲田大学（3）、立命館大学（2）、中央大学（2）、和歌山高商（2）、京都高蚕（2）、延禧専門（2）、普成専門（2）、京城高商、日本大学、国学院大学
東京（19）	日本フェルト（5）、東京市役所（4）、東鉄（3）、鉄道省（2）、簡易保険局（2）、北魚倶楽部（2）、金門倶楽部
愛知（15）	名鉄局（4）、市役所（2）、東邦電力（2）、東邦瓦斯（2）、橘俱、岡崎庭協、商友俱、名電鉄
大阪（22）	不明
兵庫（16）	大鉄（3）、川崎製鉄（3）、内務省土木（3）、神戸山手（3）、神戸庭協（2）、川崎造船、関学庭俱
愛媛（17）	商業（4）、新居浜住友（4）、伊予鉄、松山中、日銀、宇和島中、運動具商、三島中、済美高女、新居浜倉網、国鉄
広島（14）	不明

「日満交驩軟式庭球競技の幕開く」『庭球』5巻10号、1939年、7-8頁を参考に作成

3-4. 課題と成果

1939（昭和14）年9月6日の広島代表と満洲国代表の試合を最後に日満軟式庭球大会が閉幕した。日満軟式庭球大会は軟式庭球初の国際試合として注目されたが、「最初私達が考へてゐた『国際競技』といふ点に於ては、どうもびったり来なかった」⁶⁵⁾、「国際競技と名乗る事は形式、内容ともに今後改善の余地はいろ／＼ある」⁶⁶⁾との意見が出されたように、国際試合と称するには満足のいく内容ではなかったようである。

その理由としては、日本代表と満洲国代表の対抗戦が実施されなかったことが挙げられる。日本軟式庭球連盟理事の佐口哲は、「日満競技で惜しいのは、何故に全日本軍を組織して戦はなかったか、と言ふ事である。少くとも国際競技と言ふ看板を以て行った試合は、たとへ内地人の多い満洲軍であっても東京とか大阪で全日本軍との対戦を行ふべきであった」⁶⁷⁾と述べている。上述した満洲国遠征のように、日満軟式庭球大会においても日本代表と満洲国代表の対抗戦が想定されていたと思われるが、実際には日本代表は構成されずに学生代表や各地域代表と満洲国代表の対戦に留まった。このような大会形式は満洲国側から提案されたものであり⁶⁸⁾、日本軟式庭球連盟と満洲国側とは「観点の相異」があったようである⁶⁹⁾。

しかし、日本軟式庭球連盟は、日満軟式庭球大会を「対内的は申すに及ばず対外的にも軟式庭球の真価を示し得た」ことから「最も意義深い催しの一つ」と評価した⁷⁰⁾。対内的成果としては、学生代表の張日剛が「国際化された国技としてスポーツ界に堂々と潤歩出来るやうになった」⁷¹⁾と言及したように、軟式庭球界の自己存在感を高めたことが考えられる。一方、学生代表と満洲国代表の対戦について論じた豊村池男が「都下各新聞運動欄の幾行かを占有した」⁷²⁾ことを成果として示したように、対外的成果としては、軟式庭球を世間やジャーナリズムにアピールする格好の材料となったことが挙げられる。

4. おわりに

日本庭球連盟は軟式庭球の国際化を目指して、チルデン、ヴァインズ招待庭球大会を開催したり、満洲国遠征や東京オリンピックへの参加を試みたりした。この動きには国際化しなければ世間の関心を得にくいという時代背景が作用していたとみられ、国際化を進めるにあたり日本庭球連盟は軟式庭球が普及していた満洲国を特に重要視した。

しかし、満洲国への働きかけは日中戦争の勃発による満洲国遠征の中止を契機として停滞し、日本庭球連盟の国際化に向けた動きは影を潜め

ることになった。このような状況下、満洲国側から日満軟式庭球大会の開催が提案され、これを受け入れた日本庭球連盟は国際化の端緒として日満軟式庭球大会を位置づけるに至った。すなわち、発端は満洲国側であったが、日満軟式庭球大会は膠着状態であった軟式庭球の国際化に向けた動きを再始動させる転機となったと理解することができる。

1939（昭和14）年8月下旬から9月上旬にかけて日本で開催された日満軟式庭球大会は、軟式庭球初の国際試合として注目された。しかし、その実態は、日本代表と満洲国代表の対抗戦が実施されずに、学生代表や各地域代表と満洲国代表の対戦に留まったように、国際試合と称するには物足りなさが残るものであった。このような大会形式は満洲国側の意向であり、そこには開催準備における意思疎通の不足が少なからず影響していたであろう。また、満洲国代表選手が在満日本人と在満朝鮮人だけで構成されていたことも、今日的にみて国際試合としての違和感を覚える。一方で、軟式庭球初の国際試合として注目されたことは、あまり脚光を浴びなくなっていた軟式庭球への関心を集めることに少なからず繋がった。国際試合としての実態はいかにせよ、日満軟式庭球大会は軟式庭球が国際化されたスポーツであると世間にアピールする場となったのではないだろうか。

日満軟式庭球大会の第2回大会は1941（昭和16）年に満洲国で開催される予定であったが、実際は1年延期されて満洲国建国十周年慶祝東亜競技大会へと組み込まれた⁷³⁾。日満軟式庭球大会に関する満洲国側の動向を含めて、その後の軟式庭球の国際化に向けた推移に迫ることが今後の課題である。

【付 記】

本研究はJSPS 科研費 JP18K17864 の助成を受けたものです。

注および引用・参考文献

- 1) 山邊真雄『軟式庭球』日本教育新聞社、1948年、14頁。
- 2) 表孟宏(編)『日本庭球史—軟庭百年—』遊戯社、1985年。
- 3) 後藤光将「日本におけるソフトテニス競技の全国統括組織の形成と確立」大熊廣明(監)『体育・スポーツ史にみる戦前と戦後』道と書院、2013年、36-52頁。
- 4) 後藤光将「軟式と硬式の社会思想」『体育の科学』67巻9号、2017年、598-602頁。

- 5) 林郁子「ソフトテニスをする身体」竹谷和之(編)『＜スポーツする身体＞とはなにかーバスケットへの問い・PART1.』叢文社, 2010 年, 92-118 頁.
- 6) 国際化とは、国家・国境を越える交流や広がり意味着。スポーツの国際化やグローバル化（国家・国境という枠組みを前提としない）については、文化帝国主義であるとの批判とそれに対する再批判が展開されている（アレン・グットマン『スポーツと帝国ー近代スポーツと文化帝国主義ー』谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝(訳), 昭和堂, 1997 年）。スポーツの国際化やグローバル化は、確かに文化帝国主義の側面を有しているが、日本では近代テニスから軟式庭球が創造され土着化したように、必ずしも一方の伝播に留まらないと考えられる。
- 7) 金誠「リットン調査団と満洲国建国記念連合大運動会ー関東軍による宣伝・宣撫工作としてのスポーツー」『札幌大学総合論叢』44 号, 2017 年, 37-59 頁.
- 8) 高嶋航『帝国日本とスポーツ』塙書房, 2012 年. 高嶋航「満洲における日中スポーツ交流（1906-1932）：すれちがう「親善」」『京都大学文学部研究紀要』57 号, 2018 年, 63-98 頁.
国内的には、岡部平太の人物史の視点から満洲国のスポーツが描かれ、体育・スポーツ政策や建国大学における武道教育についても明らかにされている（入江克己「日本近代における植民地体育政策の研究（第 1-6 報）」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』35 巻 2 号-38 巻 2 号, 1993-1996 年. 志々田文明『武道の教育力ー満洲国・建国大学における武道教育ー』日本図書センター, 2005 年. 高嶋航『国家とスポーツ 岡部平太と満洲の夢』KADOKAWA, 2020 年）。
- 9) 機関誌は『テニス』と題して 1935 年 4 月に創刊された。その後、同誌は 1936 年 2 月に『庭球』と改題し、1943 年 1 月まで発行された。
- 10) 日本庭球連盟に改称後から国内統括団体としての活動が活発となり、機関誌も発行され始めたことから、日本軟球連盟の軟式庭球の国際化に関する動向については検討対象から外した。
- 11) 「本連盟昭和十年度評議員会」『テニス』1 巻 2 号, 1935 年, 8 頁.
- 12) 「庭球競技」『満日年鑑』満洲日報社, 1934 年, 604-607 頁.
- 13) 「本年度の国技庭球界」『庭球』3 巻 2 号, 1937 年, 4 頁.
- 14) 「渡満選手並に日程決る」『庭球』3 巻 7 号, 1937 年, 11 頁.
- 15) 同上.
- 16) 日本庭球連盟「時局に鑑み満洲遠征を中止す」『庭球』3 巻 7 号, 1937 年, 附記.
- 17) 星野龍猪「チルデン、ヴァインズに軟球感を聞く」『庭球』2 巻 10 号, 1936 年, 16 頁.
- 18) 同上, 17 頁.
- 19) 鈴木堅三郎「チルデン、ヴァインズ両氏招待大会の印象」『庭球』2 巻 10 号, 1936 年, 2 頁.
- 20) 前掲 13) 「本年度の国技庭球界」4 頁.
- 21) 永井松三(編)『報告書』第十二回オリンピック東京大会組織委員会, 1939 年, 52 頁.
- 22) 「評議員会席上に於ける宮田会長の挨拶」『庭球』3 巻 2 号, 1937 年, 巻頭.
- 23) 極東選手権競技大会の満洲国参加問題を契機として極東体育協会が解消され、新たに東洋体育協会が結成された。東洋体育協会は 1938 年に東京で第 1 回東洋選手権競技大会を開催する計画を立てていた（前掲 8) 『帝国日本とスポーツ』32-33 頁）。
- 24) 「国技」に武道、「国外ニ発達セル競技」に野球が選ばれた（前掲 21) 『報告書』105 頁）。
- 25) 正親不二夫「丑年を迎えて」『庭球』3 巻 1 号, 1937 年, 3 頁.
- 26) 鈴木は「自分はこの国産庭球の国際的進出には、多分の可能性をもってみると信ずる。大衆向として経済的から云っても、趣味の点から見ても、こんな手軽なスポーツは他にない」と考えていた（前掲 19) 「チルデン、ヴァインズ両氏招待大会の印象」2 頁）。
- 27) 前掲 25) 「丑年を迎えて」3 頁.
- 28) 正親はチルデン、ヴァインズ招待庭球大会に関して「昨秋チルデン、ヴァインズに見せたことも、決して意味なき業とも思へぬ」との意見を述べている（同上）。
- 29) 同上.
- 30) 満洲国との関係を重要視した日本庭球連盟は「本年（1937 年：引用者）のこの大会（全日本一般男子選手権大会：引用者）には国際進出の第一歩として且つ日満提携の第一段階として、特に除外例を設けて満洲国人の参加を容認」した（前掲 13) 「本年度の国技庭球界」3 頁）。しかし、日中戦争の影響によりこの大会に満洲人は参加できなかったと思われる。
- 31) 石井昌二郎「軟球の発展について」『庭球』3 巻 7 号, 1937 年, 4 頁.
- 32) 前掲 2) 『日本庭球史ー軟庭百年ー』47 頁.
- 33) 前掲 31) 「軟球の発展について」5-6 頁.
- 34) 北折辰雄「満洲国代表軍を迎えて」『庭球』5 巻 7 号, 1939 年, 2 頁.
- 35) 前掲 8) 『帝国日本とスポーツ』38-60 頁.
- 36) 正親不二夫「日満交驩競技大会を想ふ」『庭球』5 巻 10 号, 1939 年, 3 頁.
- 37) 山邊貞雄「日満交驩軟式庭球戦日誌」『庭球』5 巻 10 号, 1939 年, 40 頁.

- 38) 前掲 36) 「日満交驩競技大会を想ふ」3 頁.
- 39) 「ボールの配給と日満交驩競技」『庭球』5 巻 3 号, 1939 年, 2 頁.
- 40) 「軟式庭球初の国際試合」『読売新聞』1939 年 6 月 14 日, 朝刊 4 面.
- 41) 例えば、南満洲鉄道の内地遠征 (1920 年、1936 年)、東京金門倶楽部の大連遠征 (1925 年)、関東学生連盟の満洲遠征 (1938 年) などが行われていた (三島正雄「大満洲帝国より日本遠征庭球団来る」『庭球』5 巻 3 号, 1939 年, 5 頁)。
- 42) 三島正雄「日満交驩競技に出場の我が兵庫選手を語る」『庭球』5 巻 6 号, 1939 年, 8 頁.
- 43) 前掲 34) 「満洲国代表軍を迎へて」3 頁.
- 44) 「日満交驩庭球戦挙行ニ関スル件」アジア歴史資料センターRef.B05015839400, 在本邦留学生本邦見学旅行関係雑件／便宜供与関係 (外務省外交史料館)。
- 45) 日本軟式庭球連盟は満洲国代表が立ち寄った朝鮮から代表選手変更の知らせを聞いた (前掲 37)「日満交驩軟式庭球戦日誌」41 頁)。
- 46) 前掲 34) 「満洲国代表軍を迎へて」2 頁.
- 47) 同上, 3 頁.
- 48) 「日満交驩軟式庭球競技大会」『庭球』5 巻 10 号, 1939 年, 4 頁.
- 49) 前掲 44) 「日満交驩庭球戦挙行ニ関スル件」.
- 50) 同上.
- 51) 前掲 48) 「日満交驩軟式庭球競技大会」4 頁.
- 52) 当初の計画では愛媛ではなく福岡が候補となっていたが、交渉が決裂したのか直前になって福岡から愛媛に変更となった (前掲 37)「日満交驩軟式庭球戦日誌」40 頁)。
- 53) 当時の競技規則第 40 条第 1 項 (前掲 2)『日本庭球史—軟庭百年—』158 頁)。
- 54) 叶澤清介「満洲国代表軍対全日本学生軍観戦記」『庭球』5 巻 10 号, 1939 年, 19 頁.
- 55) 長与次郎「日本遠征雑感」『庭球』5 巻 10 号, 1939 年, 13 頁.
- 56) 前掲 44) 「日満交驩庭球戦挙行ニ関スル件」.
- 57) 前掲 41) 「大満洲帝国より日本遠征庭球団来る」5 頁.
- 58) 日本軟式庭球連盟が外務省に提出した名簿には厳秉律、金明善、李應麟、金文暉の 4 名に印が付されていることから (前掲 44) 「日満交驩庭球戦挙行ニ関スル件」)、その他は在満日本人であったと考えられる。なお、満洲国では国籍法が制定されず、在満日本人・朝鮮人・台湾人は満洲国の民籍法が適用された一方、それぞれ日本国籍として日本戸籍・朝鮮戸籍・台湾戸籍を有した (遠藤正敬『近代日本の植民地統治における国籍と戸籍—満洲・朝鮮・台湾』明石書店, 2010 年)。
- 59) 藤澤亮四「予想短評・満洲国代表選手」『庭球』5 巻 6 号, 1939 年, 13 頁.
- 60) 張日剛「学生選手」『庭球』5 巻 10 号, 1939 年, 14 頁.
- 61) 前掲 59) 「予想短評・満洲国代表選手」13 頁.
- 62) 南満洲鉄道庭球部は日中戦争の影響により任務地を離れることが出来なかったようである (山名忠夫「明治神宮大会を顧みて」『庭球』6 巻 2 号, 1940 年, 12 頁)。
- 63) 「日満交驩軟式庭球競技の幕開く」『庭球』5 巻 10 号, 1939 年, 7 頁.
- 64) 佐口哲「『全日本学生軍』の結成」『庭球』5 巻 10 号, 1939 年, 12 頁.
- 65) 前掲 34) 「満洲国代表軍を迎へて」3 頁.
- 66) 前掲 36) 「日満交驩競技大会を想ふ」3 頁.
- 67) 佐口哲「昭和十四年の『軟式庭球概観』」『庭球』6 巻 3 号, 1940 年, 4-5 頁.
- 68) 「活気を呈した初理事会」『庭球』5 巻 2 号, 1939 年, 8 頁.
- 69) 前掲 34) 「満洲国代表軍を迎へて」3 頁.
- 70) 前掲 37) 「日満交驩軟式庭球戦日誌」40 頁.
- 71) 張日剛「学連の対外試合に就いての一考察」5 巻 7 号, 1939 年, 4 頁.
- 72) 豊村池男「国際競技トップの対満全日本学生軍」『庭球』5 巻 8 号, 1939 年, 3 頁.
- 73) 「臨時全国代議員会開催」『庭球』7 巻 6 号, 1941 年, 15 頁.